

2023 年度 傾斜的研究費(部局長裁量経費)成果報告書

基礎看護学における超音波装置の導入に関する報告

【超音波装置を用いた教育の目的】

患者に最善のケアを提供するためには、科学的なエビデンスを活用する根拠に基づく看護 (Evidence-Based Nursing 以下 EBN) が必要とされている。EBN を実践するためには、患者のニーズを優先しながら、患者に適したケアを患者の状況や科学的知識と観察を含む臨床判断から必要性を判断し、方法や手段を選択が重要となってくる。

また、看護実践は、知識・技術・態度によって構成されている。そのため、看護技術教育は、「技術」のみの単独で存在するものではなく、提供される技術の裏付けとして知識と、それを提供する態度を看護師の態度をも内包し教授される。

【超音波装置を用いた教育の実際－2024－】

本単元「検査をうける対象者への看護」では、講義1コマ(90分)、演習2コマ(180分)で教授する。

講義の授業目標は、診療を援助する検査の目的を理解し、主要な検査とそれを受ける人への看護を考えることができるとし、検体検査と生体検査についてとその看護について学習する。その後、演習にて、検体検査として尿検査時の看護、生体検査として心電図、聴覚検査、超音波検査をうける患者の看護を配置し、検査の目的や、検査中・検査後の観察等を学習する。

超音波を受ける患者の看護を演習に加えたねらいは、近年、訪問看護等における排泄ケアについてこれまでの問診、聴診、触診などのフィジカルイグザミネーションだけでなく、より EBN に基づいた排便コントロールの一助として超音波検査を用いることが多くなっており、患者に侵襲なく看護としての臨床判断に活用が広まっていることから演習に組み入れることとした。

学生は、各検査法をローテーションしながら看護師体験と患者体験を通じて検査の意義と看護師としての役割を学習した。特に超音波検査法では、これまでのフィジカルイグザミネーションに加えて、患者の身体への侵襲なく、客観的な判断ができること、読影のための知識の必要性とその看護について演習を通じて学習した。

学生の反応としては、視覚的に状態を捉えることができることおよび操作の簡便性に純粋に関心を抱いていた。教員の実施する超音波装置のデモンストレーションでは画像の読影に難渋していたが、超音波装置を代表者数人が自由に動かし、映し出される画像に対して解剖学やフィジカルイグザミネーションの内容を想起させることで、身体を3次的に捉えることに理解を深めている様子だった。演習の時間的制約や台数制限から、演習中に操作をすることができない学生たちもいたため、休憩時間に操作を希望する学生も多かった。超音波装置を用いた演習を実施することで、患者アセスメントのための情報を能動的に収集できる方法が増えるということに学生は重要性を感じており、演習を実施する意義があると考えられた。